子どもを学びから遠ざける「学びのすすめ」

センター協力研究員（姫路工業大学環境人間学部講師）　高　田　一　宏

2002年には完全学校五日制が実施される。これに伴う新しい学習指導要領のもとでは，教育内容が大幅に削減され，いよいよ「総合的な学習」が導入される。だが，その時，基礎基本の徹底の名のもと，「学習遅進児」むけに断片的知識の注入やドリル練習が繰り返される一方で，従来の尺度で「高学力」と評価されてきたような子どもたちが「総合的な学習」に積極的に取り組む，という「二重構造のカリキュラム」が出現するかもしれない。

上に挙げたのは，数年前，ある雑誌に私が書いた文章からの引用です(「教育調査と教育改革」『解放教育』1998年９月号)。今，私は，１月17日付で文部科学省が公表した「確かな学力向上のための2002アピール―学びのすすめ―」を読み，かつて私が抱いた危惧が，現実になりかねないと感じています。

「学びのすすめ」は，指導要領に示した教科の学習内容は最低基準であり，理解の進んだ子どもは発展的な学習で力を伸ばす，という趣旨のことを述べています。また，この文書には，「理解や習熟の程度に応じた指導・個別指導や繰り返し指導」によって「基礎・基本の着実な定着」をはかり，「観察・実験，調査・研究，発表・討論などの体験的・問題解決的な学習」によって「思考力・判断力・表現力などの育成」をはかる，との説明図も載っています。

まず，「基礎・基本」を，習熟度別・個別指導や繰り返し指導によって，それで足りなければ放課後の補充学習や宿題によって，徹底的に身につけさせよう。しかる後，「思考力・判断力・表現力」を，「総合的な学習」などにおける体験的・問題解決的な学習によって伸ばそう。「学びのすすめ」が想定しているのは，このような学習指導です。教科と「総合的な学習」の関係については，「学びのすすめ」は，「〔総合的な学習では〕各教科で身につけた知識や技能を相互に関連づけ，総合的に働くようにする。総合的な学習の時間」で身につけた力を各教科等の学習のなかで生かす」と述べるにとどまっています。

基礎・基本の学習達成度や体験的・問題解決的学習に対する積極性に，家庭背景による差が存在することは，2001年に大阪で実施された調査の結果が示唆しています。このままでは，「学びのすすめ」は，体験的・問題解決的な学習を，首尾よく基礎・基本を習得した子どもの特権にしてしまいかねません。「学びのすすめ」は，子どもの家庭背景に対応した別メニューの教育課程を準備しているのです。

「学びのすすめ」における基礎・基本の学びは，野球にたとえれば，試合に出る見通しのないまま，キャッチボールや素振りを繰り返しているようなものです。これは試合のための練習ではなく，練習のための練習です。「万年補欠」のレッテルを貼られた選手は，よほど忍耐強くないかぎり，やる気を失って練習をやめてしまいます。すでに，子どもの学習時間の減少や知的好奇心の衰退は，全国各地の調査で明らかになっています。今後，もし，「学びのすすめ」の通りに学校が変わっていけば，学習到達度が低い子どもは，ますます学習意欲を失っていくでしょう。

私は，大阪各地で様々な「総合的な学習」の実践をみてきましたが，ある時，面白いことに気がつきました。それは，基礎・基本とされている知識や技能は，体験的・問題解決的な学習の中で使用されたとき，その有用性が子どもに実感され，子どもの中に着実に定着するのだということです。学業不振に陥った子どもの多くは，勉強に辟易しています。注入主義的な方法は通用しません。体験学的・問題解決的学習は，工夫次第で，そのような子どもが学びに向かいなおすきっかけになるのではないかと思います。

文部科学省版の「学びのすすめ」に対抗しうる，新しい「学びのすすめ」を，編み出さなければなりません。その手がかりは，きっと，学校の現場に埋まっているはずです。